

国立国語研究所学術情報リポジトリ

[特集「日本語教育における実践研究」] 実践の
公表に向けて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://repository.ninjal.ac.jp/records/1870

実践の公表に向けて

文野 峯子・阿部 洋子

BUNNO, Mineko・ABE, Yoko

1. 実践を共有するために

『日本語教育論集』（以下、論集）は、「日本語教育および日本語教師教育の内容・方法に関わる研究、特に、教育実践にもとづいた研究、新たな視点に立つ研究、将来の展開が期待される研究の成果を積極的に公表することにより、日本語教育の発展に寄与」することを目的に刊行されてきました。毎年、この目的に即した内容の論文の投稿が数多くあり、日本語教育に携わる者に紹介する価値のある教育実践に基づいたものも少なくありません。しかし、掲載に至らないものが多いことも事実です。論集の編集委員会では、こうした現状を踏まえ教育実践に基づいた論文を執筆する際の留意点を紹介する必要性が確認されました。

そこで、本稿では、まず、編集委員の立場から論文に求められる基本的な要件を挙げます。そして、過去6年間論集に投稿された論文に対する査読者のコメントから、修正を求めた論文、採用に至らなかった論文の問題点を概観します。その上で、実践を公表する際の留意点について具体的に見ていくことにします。

なお、論集の投稿規程では、原稿の内容によって、研究論文、報告、研究ノートという3種類を設けていますが、本稿では、特に区別が必要な際にはその旨を明記し、それ以外は投稿された原稿すべてを「論文」としています。また、教育実践に基づく論文は、仮説検証型のものや探索的なものに大別されますが、本稿では論文の種別を問わず、論文を公表する、つまり、自身の実践や実践に基づく発見を不特定多数の他者に文章によって伝えるという共通項の部分で、留意すべき点を述べています。

論文を公表するということは、自身の実践やそこから得られた発見を他者に伝えるという作業です。「伝えたいこと」をきちんと伝えるためには、何よりもまず、「伝えたいこと」が書き手自身に明確になっていなければなりません。その上でその「伝えたいこと」を「わかりやすく」、「説得力をもって」文章化する必要があります。本稿では、「伝えたいこと」が「伝わる」ために必要な要点を示していきます。

最後に、資料として「ワークシート：アウトラインを作ってみよう」を付けました。初めて論文に挑戦する方や論文の焦点が絞られていない方は、実際に書き始める前にぜひこのワークシートを使ってアウトライン作りを試みてください。

論文の基本的要件

まず、掲載に至る論文の第一の要件は、公表する価値があるかどうかということです。公

表に値する論文というのは、内容面からは、これまでに発表された研究にはないオリジナリティと、他者と共有しうる普遍性を持つもの、そして他の現場に役立つものです。形式面からは、客観的な記述や論理の一貫性などに十分な配慮が行き届いたわかりやすく読みやすい文章であることが重要な要件になります。

また、特に教育実践に基づいた研究を扱ったものには、何のために何をしたのかが、明確にわかりやすく記述されることが求められます。研究の成果を論文にまとめる際に、計画段階で考えたことを思い返して記述すればよいでしょう。しかし、計画段階では問題意識が漠然としており、実践後じっくり振り返ったときに研究の焦点が明確になることもよくあります。さらに、研究の計画と実際との間にずれが生じることも多く、伝えたいことが少し変わることも多いものです。いずれの場合も、何のために何をしたのかを明確にすることと、それを知識と経験を共有しない他者にも理解できるように書くという姿勢を忘れないことが肝要です。

研究者倫理の問題

教育実践を扱う場合に特に留意してほしいことは、研究の対象になった学習者や関係者に対する配慮です。研究対象、あるいは協力者になってもらうこと、発話やメール等の記述内容をデータとして使うことについて承諾を得ること、また、承諾を得ていることを注の形でよいので、記述されることが望まれます。実名を挙げるなどの個人が特定されるような記述は避けるべきです。

研究者の倫理の問題は、日本語教育の分野ではこれまであまり大きく取り上げられることはありませんでしたが、実は非常に重要な問題です。欧米諸国では、データに関係する全ての人に承諾を得ることが事実上無理となり、論文として公表できなくなるケースも多いそうです。データ収集の時点で研究対象となることについて承諾を得る、公表する前に論文を読んでもらい再度確認するなどによって、くれぐれも協力者に迷惑がかからないように注意したいものです。

論文作成上の問題点

論集の過去6年間の投稿論文に対する査読者コメントをデータとし、掲載されなかった論文の問題点を探ってみたところ、問題は2つに大別されました。一つは、記述内容に関わるもので、具体的には、研究の目的と方法の整合性、データの収集、データから結論を導き出すために行う操作や分析などの方法と解釈の適切さ、全体の構成等です。もう一つは、書き方に関わるもので、文脈のねじれや文法・表記の誤用等の作文技術に分類されるようなものと、文章の論理性や客観性といった内容を伝えるための文章力に関わるものです。コメントは以下の表1のようにまとめられます。

[表1 指摘された問題点]

記述内容に関わるもの	書き方に関わるもの
<ul style="list-style-type: none"> ・全体に関わるもの ・研究・報告の意義 ・方法論（データ収集, 操作・分析, 解釈） ・データの使用（研究者倫理） ・概念・用語の理解と使い方 ・先行研究 	<ul style="list-style-type: none"> ・わかりやすさ・読みやすさ ・論理性 ・体裁・書式 ・引用


2. 実践を公表する際の留意点—論文，報告文を中心に

ここからは，過去の査読票から得られた留意点を具体的に見ていくことにします。前述のように，ここでは、『日本語教育論集』の査読票に記されたさまざまな形態（研究論文・実践報告・研究ノート）の文章記述に関する留意点をまとめてとりあげています。項目によってはみなさんが執筆中の論文に当てはまらないものもあります。記述内容や目的に応じて，必要な項目を選択的に参照してください。留意点は，表1に示したように大きく2つの部分，1. 記述内容に関わるもの，2. 書き方に関わるものに分けて提示します。

それぞれの留意点は，まず，「ポイント」として簡潔にまとめました。そして，具体的などのような点が問題になっているかを見るために，論集の査読コメントの中から参考になるものをいくつか選んで提示しています。これを読むと，査読者がどのような点に注目しているかを具体的に知ることができると思います。なお，査読コメントは，コメントの対象になった論文が特定されないように，また，一文で読んでも意図が伝わることを考え，加筆修正してあります。さらに，問題を回避するためにどのようにしたらよいか，その具体例を採用論文からとりあげ，「参考」部分で提示しました。

2.1 記述内容に関わる留意点

2.1.1 全体に関わること

 **ポイント**：伝えたいことを明確に伝える内容と構成になっているか。

テーマは記述内容と一致しているか，必要な部分が揃っているか，情報が多すぎないか，わかりやすい構成になっているかなどを確認しましょう。

査読コメント例（一部加筆・修正）

整合性

- ・「いま，手持ちのデータで何が言えるか」ということを考えた上で，今回の論文の目標を設定しなおしてください。
- ・この論文の目的として設定されている事項について考察が十分なされていないため，論文としてはまったく不満足な結果に終わっていると言わざるを得ません。論文の設計自体をもう一度根本的に見直していただく必要があるように思いました。

- ・タイトルから、〇〇が述べられていることを期待して読みましたが、期待にできていません。
- ・Xに比重が置かれていますが、本論の目的と論旨を考えると、XだけでなくYの例示も必要です。Xの有効性を検証するのなら、Zについての言及も必要です。
- ・意欲的な試みではありますが、内容が豊富でありすぎたためか、〇〇の分析については中途です。


構成

- ・論理構成やその展開に問題があります。参照する基本理念と執筆者の教育理念、本論文で述べられている様々な活動とがどう結び付くのか、十分な説明がなされているとは言えません。
- ・データがうまく位置づけられていません。論旨を明確に伝えるためには、データを最も適切な位置に配置する必要があります。

参考（採用論文から）

資料「本論集に採用された論文のアウトライン例」を参照してください。

2.1.2 研究・報告の意義

 **ポイント**：公表の価値があるか。

論文を公表する際、公表の価値があるかという点は最も重要です。他の論文・報告に見られない本稿の特徴は何か、他の教育現場にどう役立つかを示しましょう。

査読コメント例（一部加筆・修正）

オリジナリティ、普遍性、有用性の提示

- ・実践報告をおこなう際には、類似の実践が従来なかったかどうか、もしあったとすれば従来の実践と今回の実践はどういう点が違うか（オリジナリティ）について言及する必要があります。もし類似の実践がなかったというのであれば、その旨を明記してください。
- ・どこが他の教育現場にも応用できるか（普遍性、有用性）を示す必要があります。
- ・「このような〇〇が起こった」ということを示して終わりにするのではなく、ここから「何らかの提言」につなげるといいのではないかと思います。例えば、今回得られた知見を生かして授業の改善案を提示するとか、こうした授業を進める上で担当者（教師）はどのようなことに注意すべきかを論ずる、などです。こうした提言が得られて初めて、事例を詳細に検討した意義（有用性）が出てくるのではないかと思います。

参考（採用論文から）

- オリジナリティ、普遍性、有用性の提示について、採用論文に以下の例が見られました。
- 例1：論文が報告する活動の重要性を説き（有用性、普遍性）、その上でまだこの種の活動が不十分であることを述べてオリジナリティを示す。
- 例2：先行研究の成果を簡単に紹介し、本稿が焦点を当てている部分の研究がこれまでにないこと（オリジナリティ）を述べて本研究の意義を示す。

2.1.3 方法論（データ収集，データの操作・分析，データ解釈の方法）

⑥ **ポイント**：データやその分析・解釈の方法は適切か。

読み手を納得させるためには、データや分析方法が適切であることが重要です。なぜそのデータを分析対象とするのか、データはどんな基準で抽出されたのか、分析・解釈の方法は結論を導くために適切かなどが十分に検討されなければなりません。例えば、データ収集の方法としてアンケートを選んだ場合、なぜインタビューやテストではないのかを明確にしておく必要があります。また、分析や解釈のプロセスがデータとともに示されないと、読み手の信用を得ることはできません。データ収集、操作・分析・解釈等のプロセスが見えるように示しましょう。

査読コメント例（一部加筆・修正）

データについて

- ・読み手が論文を理解するために必要なデータが提示されていません。特定の教育機関や学習者群を越えて、実践の方法やその成果を共有するためには、「なぜ、なにを、どのように行ったのか」といった基本的な事実関係を明示的に記すことが肝要です。
- ・対象者の人数、母語、性別、日本語能力なども、本論文を理解するためには重要な情報です。
- ・分析対象を1名に限ったことそのものには大きな問題はないと思います。しかしその場合も、なぜこの回答者、その言語の母語話者のデータを分析の対象とするのか、理由を示す必要があります。

データの操作・分析方法について

- ・論文の目的と分析の方法が一致していません。使用する方法論について、十分な理解が必要です。
- ・この特定の方法を本稿で採用する意義と、それによって見出された結果の意義が読み手に伝わってこない。
- ・分析の方法について説明が必要である。
- ・次回以降アンケート調査をなさる場合は、アンケート手法に関する書籍などを読んで上で調査を企画なさるようお勧めします。

解釈とその根拠

- ・実践のプロセスの記述が不足しています。そのため、分析と解釈の信頼性が判断できません。したがって、実践全体の評価も困難です。たとえば、第1段階ではどのような指導を行い、それが最後の成果にどのようにつながったのかを具体的に示してください。
- ・全体的に非常に当たり前のことしか述べられていないという印象が強くなったようです。これは、データの分析・解釈部分が表面的なもの、非体系的なものとなっているからであると思います。
- ・自由記述の回答の解釈が恣意的です。自由回答というものは、やろうと思えばどのような解釈でもできてしまうものですので、そこから何らかの結論を導き出そうというときは、アンケート以外の証拠を援用し、「いろいろな解釈がありうるが、その中でこの解釈が最も適当である」ということを示す必要があると思います。
- ・解釈に一貫性が欲しい。

参考（採用論文から）

ひとつの論文で複数のデータや方法を用いるケースも多く見られます。採用された論文の代表的なデータ例は以下です。

例1：実際に使用した教材，カリキュラムや指導手順を示す表


例2：学習者が作成したレポート，ワークシート記述や発話

例3：質問紙調査の結果やテストの結果

例4：接触場面の自然会話や教室談話

採用された論文は，データ収集から解釈にいたるまでのプロセスに最も多く紙幅を割いています。また，データやプロセスを十分に示した上で，考察や成果の判断をどのように下したかを文章によって詳しく説明しています。

2.1.4 データの使用（研究者倫理）

 **ポイント**：研究者の倫理は，守られているか。

データが論文執筆者本人のものでないときは，データを使用するための許可が必要です。自分が教えている学習者だから大丈夫と安易に考えてはいけません。必ず，すべてのデータについて提供者や協力者の承諾を得るようにしましょう。


査読コメント例（一部加筆・修正）

- ・協力者全員からデータ使用許可は得ていますか。
- ・個人情報および著作権への配慮は大丈夫ですか。処理が済んでいる場合は，その旨も明記してください。

参考（採用論文から）

採用論文の一つに，読解授業のテキストとして使用した新聞記事を論文中に資料として提示しているものがありますが，新聞社より教材への利用および論文への転載の許可を得ていることを注で記しています。

2.1.5 概念・用語の理解と使い方

 **ポイント**：概念の不確かな理解や用語の不用意な使用はないか。

概念の不確かな理解や用語の不用意な使用は，読み手を混乱させます。キーワードやキー概念は，正確に理解した上で使きましょう。概念や用語は，本文中での意味や使い方を明記しましょう。

査読コメント例（一部加筆・修正）

- ・重要な概念や用語の具体的な説明が乏しく，それが何を意味するのかが不明です。
- ・一般的とはいえない用語，読み手によって解釈が異なることばが**不用意**に用いられています。
- ・他分野の用語や表現が使われていますが，それらの文言を無条件で日本語教育現場に当てはめようとするには違和感を覚えます。

- ・類似する用語が混在しています。それらを併せて使用するなら、その理由・意図がわかるよう注釈等を付ける必要があります。
- ・概念整理に誤解が見受けられます。


参考（採用論文から）

用語の定義の仕方には以下のような例が見られました。

例1：本文中で定義する。本文に最初に現れたときに「接触場面の会話（以下、接触会話）」のように（ ）を使用して示す。

例2：定義を注で示す。本文で使用することばの意味を、論文末の注で解説する。

2.1.6 先行研究

 **ポイント**：本稿に必要な先行研究が適切に選択され、提示されたか。

先行研究の理論的な枠組みや研究成果の提示は、分析や解釈が独断ではないことを証明するために必要です。また、先行研究との関係を示すことで、論文のオリジナリティを示すこともできます。しかし、やみくもに多くの先行研究を挙げると、論文の趣旨がぼやける危険も孕みます。自身の報告や研究と直接、密接に関係のある先行研究を効果的に取り上げましょう。

査読コメント例（一部加筆・修正）

- ・類似の研究はすでに報告されています。関連文献や先行研究は、できるだけ多く読んでください。
- ・直接関係がない先行研究は、報告・研究の趣旨を伝わりにくくします。
- ・先行研究の紹介は、理論的な解釈をできるだけ簡潔にまとめ、必要な部分のみ示すように。
- ・提示された先行研究とこの報告との関係は何かを示すべきです。

参考（採用論文から）

関連する先行研究の提示例として、異なるタイプの2例を紹介します。

例1：「〇〇語話者のスピーチレベル・シフト」がテーマの場合


1つはスピーチレベル全般に関する先行研究、もうひとつは〇〇語話者のスピーチレベル・シフトに焦点をあてた先行研究を挙げる。

例2：読み手に馴染みの薄い分析・解釈の方法を採用する場合

論文内容と関連の深い先行研究だけでなく、分析・解釈の方法に関する先行研究も併せて提示する。

2.2 書き方に関わる留意点

2.2.1 わかりやすさ・読みやすさ

 **ポイント**：読み手にとってわかりやすく読みやすい文章になっているか。

論文の記述でもっとも大切なことは、読み手に内容がきちんと理解されることです。いたずらに専門用語を使用せず、「わかりやすく読みやすい表現」を心がけましょう。ただし、話し言葉の混入には注意しましょう。

査読コメント例（一部加筆・修正）


文章に関するコメント

- ・事実を述べた短文の羅列で読みにくい。
- ・繰り返しや冗長な部分、情報過多になっている部分を削ると読みやすくなります。
- ・ねじれ文、長すぎる文に注意してください。
- ・コースやプロジェクトに参加していない読み手にもわかるような文章にすることを心がけてほしい。

提示の仕方に関するコメント

- ・せつかくの実践内容が読者に伝わるよう、情報の整理をお願いします。
- ・分析方法の説明と具体的な事例分析の記述が混在していてわかりにくい。
- ・各章で述べるだけでなく、得られた結果や知見をまとめて示すと主張点が明確になる。

2.2.2 論理性


 **ポイント**：論理性は確保されているか。

論理の飛躍や強引な結論は、「論文」執筆で最も避けるべきことです。読み手に理解されなければ公表の意味がなくなります。公表前に周囲の人に読んでもらうなどして推敲しましょう。

査読コメント例（一部加筆・修正）

- ・書き手本人の中ではつながっているのであろうが、読み手には論理展開が伝わってこない。実践の具体的な結果や理論的根拠を客観的に提示し、そこから論理的に結論を導く丁寧な分析が必要である。
- ・解釈が強引であるように思われる。
- ・トートロジー（証明したいことを前提にしてそのことの証明を試みる）を避ける。定義にあてはまりそうな例を探してきて、それを定義に照らして説明したのであれば、それはトートロジーということになります。
- ・前半部分と後半部分の記述は、矛盾しているように思える。

2.2.3 体裁・書式

 **ポイント**：体裁や書式の統一に細心の注意が払われているか。


誤字脱字や文体の不統一などは、筆者の日本語力や論文執筆の姿勢を反映します。投稿論集には必ず書式規定があります。提出前に再度チェックしましょう。

査読コメント例（一部加筆・修正）

- ・参考文献の書き方には、論集によってルールがあります。投稿する論集のルールがどうなっているかを確認して、それにあわせて書き直す必要があります。ルールをしっかり守ってください。
- ・誤字脱字や、書式の不統一が多くあります。ぜひ第三者に読んでもらった上でお送りいただきたく思います。

- ・同じ用語の表記に省略形とフルの形が混在しています。略して使うときは初出のところに（ ）で注記してください。
- ・文体統一をするように。
- ・英文タイトルと英文要旨は、ネイティブチェックを受けること。
- ・記号は、説明をつけること。

2.2.4 引用

 **ポイント**：引用文献の出典提示に漏れはないか。引用と筆者の見解との区別は明確に提示されているか。読みやすい方法で提示されているか。

先行研究や収集されたデータからの引用は、論文の信頼性を高め、説得力を持たせる上で重要な役割を果たします。ただし、適切な部分を適切な方法で提示しないと、せっかくの引用がその効果を発揮できなくなります。これまでに掲載された論文を参考にして、適切な引用を心がけましょう。

査読コメント例（一部加筆・修正）

出典の明記

- ・引用の出典が不明です。〇〇を提唱した学者の名前・論文名も明記する必要があります。
- ・3ページの〇〇（2009）が参考文献にありません。

提示の仕方

- ・本文中で文献を引用する際は、「姓」を使用してください。
- ・どこからどこまでが誰が言っていることなのか、読んでいる途中でわからなくなります。引用なのか、要約なのか、あるいは筆者の見解なのかが明確になるようにしてください。
- ・引用部分は、「 」でくくる必要があると思います。
- ・引用文献が数多く登場して、とても読みにくいです。
- ・実例が10行以上にわたって本文に埋め込まれ、相当読みにくいです。改行や字下げをしたり、やりとりであることを明示するためにフォントを変えるなど体裁上の工夫をしてください。
- ・抜粋、引用部分の文字サイズをかなり小さくしているため読みにくくなっています。規定枚数を超える心配もあります。

許可の明記

- ・引用部分の掲載許可がある場合、それを明記してください。

参考（採用論文から）

採用論文には、次のような例が見られます。

例1：引用部分が短い場合、引用文章を「 」でくくり、本文中に埋め込む。

例2：先行研究の指摘や主張を要約し、「〇〇（2009）は、（要約した文）と指摘する」と主張主が明確になるようにして本文の中で提示する。

例3：引用部分が長い場合、フォントを変える、字下げをするなどの方法で本文と区別できるようにして、提示する。

資料 ワークシート：アウトラインを作ってみよう

1. アウトライン作成に向けて

論文を書く（自身の実践や実践に基づく発見を、不特定多数の他者に文章によって伝える）際には、「このことを伝えたい」という目標があります。「目標に向けて作業を進める」という点で、論文作成は山登りに似ています。山登りでは、山頂に至るまでの道筋と、各要所で必要となることを確認しておくといった事前の準備が大切でしょう。ゴールも道筋もわからないまま登りだすと、進むべき方向を見失い遭難する危険性もあります。論文作成も同様です。例えば、論文の全体像が見える前に「はじめに」を書き始めると、「まとめ」を書く段になって「はじめに」の内容とのずれが判明し、結局「はじめに」を書き直さなければならぬはめになります。実際、筆者はその辛酸を何度も体験しています。

本文を書き始める前にぜひ準備すべきものがあります。それは、目標に至るまでのガイド地図、つまり論文のアウトラインです。アウトライン作成には、まず目標の明確化が必要です。論文で「何を一番伝えたいか（主張）」が、目標となります。目標が明確になったら、そこに至るまでに必要な道筋を描きます。論文を理解してもらうには、どのような背景情報を示したらよいか、主張をサポートするためにはどの先行研究を挙げればよいか、どんなデータを使うか、収集・分析・解釈の方法はどうするかなどをざっと考えて、順番に並べてみます。そして、タイトル（各章のタイトルも含む）と記述内容が一致する構成になっているか、すべての章が主張のサポートに必要なか、読み手が理解しやすい構成かなどをチェックします。具体的には、タイトルと記述内容を、「目次＋メモ」のような形で、A4用紙1ページ程度に収まる分量で書いてみます。

実際にやってみると、アウトライン作成はかなり大変な作業であることがわかります。アウトラインを書き始めると、伝えたいことも焦点が絞り込めていない、先行研究の読み込みが不足している、などが見えてくることもしばしばあります。逆に、アウトラインができれば、論文作成は山登りよりも簡単かもしれません。アウトラインがしっかりしていれば、悪天候などの不測の事態は、山登りほど起こらないからです。

2. 本論集に採用された論文のアウトライン例

ここでは、本論集に採録された研究論文と実践報告の中からそれぞれのタイプ1本ずつを選び、その構成を表で示します。採用された論文は、いずれも筆者の主張を読み手に伝えるために構成を工夫しているので、どれを選んでもよかったです。紙幅の都合等でこれら2本にしました。論文の内容が各々固有であるように、論文の構成も決して一様ではありません。ですから、この2つのアウトラインは、見習うべきモデルとしてではなく、各々の目標に向けて構成がどのように工夫されているかという見方で見ていただきたいと思います。自身の論文に必要な（不要な）部分はどこか、なぜ必要（不要）か、などを考慮しながら利用してみましよう。

(1) 柳町他 (2006: 報告) 表中 () は先行研究

主張: 漢字辞書検索能力はさまざまな肯定的変化を現場にもたらす。

章 立 て	概 要 メ モ
1. はじめに	<ul style="list-style-type: none"> ・現状と課題 ・カリキュラム概要 ・報告の目的
2. 初級漢字教育の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・従来方法の問題点 (加納1994) ・課題への対応が必要である。(牧野他2001, 山内2005)
3. 辞書検索活動中心のカリキュラムが生み出す変化	<p>本稿が提唱する辞書検索活動を取り入れた初級漢字カリキュラムの理念と効果</p> <ul style="list-style-type: none"> 3.1 扱える漢字語彙の拡大 3.2 辞書検索を通じた漢字の構造・用法の体系的学習 (平塚・福田2005) 3.3 他の技能との連携 3.4 自立的な学習者の養成 (川口1995, カイザー 1998, 加納1999)
4. 実践報告	<p>実践例として大学の日本語研修コースの漢字クラスを紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> 4.1 授業の概要 <ul style="list-style-type: none"> 表1 [研修コースにおける初級漢字カリキュラム] 4.2 使用漢字辞書 採用の理由 (ハルベン1999) 4.3 指導項目 <ul style="list-style-type: none"> 表2 [各ユニットの指導項目と辞書検索技術との関わり] 4.3.1 導入部 4.3.2 各種索引の使用法 <ul style="list-style-type: none"> 図1 [フォント別の字形の見え方の違い] 4.3.3 検索の効率化 (宮島1982) 4.3.4 他の言語技能との関わり <ul style="list-style-type: none"> 図2 [教材例-見出しを読む] 4.4 授業の進め方 <ul style="list-style-type: none"> 図3 [授業の進め方] 図4 [教材例-基本的なルール・用法の練習問題] 図5 [教材例-デパートのフロアガイドと辞書検索の練習問題] 4.5 評価 (小テストと定期試験) <ul style="list-style-type: none"> 図6 [教材例-第1課の小テストの問題] 図7 [教材例-期末試験の問題]
5. 本カリキュラムの成果と今後の課題	<ul style="list-style-type: none"> 表3 [漢字クラスに対する評価] <p>評価の結果: 教材, 紙の辞書に対する評価。読解練習の評価 課題: 使いやすい辞書の開発と読解クラスなどとの連携</p>

(2) 向山 (2007: 研究論文) 表中 () は先行研究

主張：学習者の文法学習に関する信念、および指導方法に対する態度、学習ストラテジー、学習成果は相互に関連する。学習者の個人差と指導方法が適合しないと指導効果が現れにくい。

章立て	概要メモ
1. はじめに	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究の背景 ・ 研究のオリジナリティおよび本研究の意義 ・ 研究の目的 (Norris & Ortega 2000) 他2点
2. 先行研究	<p>2.1 習得に影響を与える個人差の研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 理論的背景 (Ellis 1994) ・ 個人差と学習成果の関係を調査した研究 (Norris & Ortega 2000) 他8点 <p>2.2 学習者の信念・態度</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 信念・態度研究の基礎 (Horwitz 1987) ・ 中国人学習者を対象とする研究2点 ・ 信念がストラテジー選択や学習成果にどう影響を与えるかの研究が少ない (Ellis 1994)。 ・ 本稿の研究課題を5つ提示 (研究課題1a, 1b, 2a, 2b, 3)
3. 研究方法	<p>3.1 調査機関・指導方法</p> <p>3.2 調査対象者</p> <p>母語, 教育機関の種類, 日本語能力レベル, 人数, 性別, 年齢</p> <p>3.3 質問紙</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「文法学習に関する信念」, 「文法指導に対する態度」, 「学習ストラテジー」の3部構成 ・ 項目はBurgess & Etherington (2002) 及び学生との話し合いの内容をもとに作成。回答は5件法, 項目数は信念20, 態度10, ストラテジー12 <p>3.4 学習成果</p> <p>学習開始6ヵ月後実施のテスト (日能試文法問題得点と相関高い)</p> <p>3.5 分析方法 結果を因子分析, 因子得点と学習成果の相関</p>
4. 結果	<p>4.1 記述統計と因子分析の結果</p> <p>4.2 信念・態度と学習ストラテジー</p>
5. 考察	<p>5.1 信念・態度と学習成果の関係 (研究課題1a,b)</p> <p>5.2 信念・態度と学習ストラテジーの関係 (研究課題2a,b)</p> <p>5.3 文法学習ストラテジーと学習成果の関係 (研究課題3)</p>
6. まとめと今後の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ 調査結果から示唆されることを4点提示 ・ 本研究の今後の展開の可能性と必要性

参考文献

- 向山陽子 2007 「文法学習に関する信念・態度、学習ストラテジー、学習成果の関連—暗示的機能的指導のコンテキストの中で—」『日本語教育論集』23号17-32 国立国語研究所
- 柳町智治・副田恵理子・平塚真理・和田衣世 2006 「辞書検索能力を養成する漢字カリキュラムの理念と実践」『日本語教育論集』22号33-47 国立国語研究所

3. ワークシート：アウトラインを作ってみよう

「伝えたいこと」（登りたい山）は決まりましたか。「伝えたいこと」が明確になっていない方、「伝えたいこと」がいくつかあって、まだ絞り込めていない方はいませんか。登る山が決まらないまま歩き出すのは危険です。まずは、1ページに収まるようにして、「伝えたいこと」と伝えるために必要なこと（そこに至る道筋）を書き出しましょう。それから、その道筋が目標とする山にあなたを導いてくれるかどうかを検討しましょう。

問題意識を明確にしよう（その1）

あなたの伝えたいことは何ですか。1～2文で書いてみましょう。

例：学習者の文法学習に関する信念、および指導方法に対する態度、学習ストラテジー、学習成果は相互に関連する。

あなた：

問題意識を明確にしよう（その2）

なぜ、それを伝えたいのですか。

章立てを書いてみよう

「伝えたいこと」を伝えるために必要なこととその順番を考えてみましょう。

1. はじめに
2. 先行研究
- 3.

各章に簡単な概要をつけてみよう

裏付けとなる先行研究も書き添えましょう。

例：1. はじめに：本稿の目的と背景を簡潔に説明する。(Norris & Ortega 2000)

2. 先行研究：

1) 信念、態度、学習ストラテジーなど、本稿の内容に関する先行研究 (Horwitz1987)

2) 分析の方法に関する先行研究 (Burgess & Etherington 2002)

〈あなたの章立て〉

- 1.
- 2.

最後に、アウトラインの検討をしましょう。質、量、順番はどうですか。わかりやすく説得力ある論文を目指しましょう。